

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

2000 / 7





子どもたちの大好きなアンパンマンファミリーの人気者を手づくり  
しよう。おもちゃやプレゼント、壁面飾りで保育室はいっぱい!!

**最新刊**

## 手づくりアンパンマンがいっぱい(全3巻)



### グッズ・プレゼント

スポンジや牛乳パックなどの身近な素材を使ったグッズ。フェルトのかわいいプレゼント小物。残り毛糸で、すいすいあんでボウシやボールに変身するアンパンマン。うちわやエプロンなど身の回りのあちこちに人気キャラたちが顔を出す、アイデアいっぱいの一冊です。

島田明美／著

A B判 96頁 定価：本体2,000円＋税

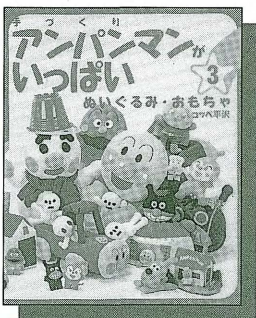


### ルームデコレーション

人気キャラクターたちで、保育室の壁面を明るく楽しく演出。入園おめでとうのパネルや、4月から3月までの月ごとの壁面構成は、子どもたちの想像力でゆかしいおはなしも生まれることでしょう。入場門やお店やごっここの屋台・コーナー飾りなど応用アイデアもいっぱいです。

千金美穂／著

A B判 96頁 定価：本体2,000円＋税



### ぬいぐるみ・おもちゃ

型紙をあてて布を切り、ちくちくぬって化せん綿をつめる。むずかしそうなぬいぐるみも、コッペさんまんに手ほどきしてもらえば、あつ、もうできちゃった! 人形やクッション、フリスビーなど遊べるキャラクターたちは、やわらかく安全なので小さい子どもたちにも安心です。

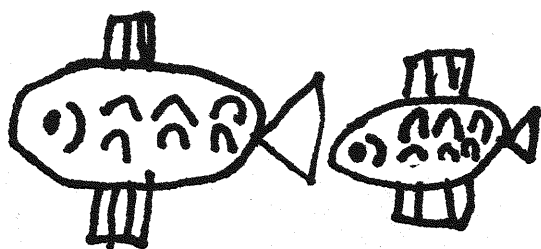
コッペ平沢／著

A B判 96頁 定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの  
**フレーベル館**

# 幼児の教育

第99巻 第7号



# 幼 児 の 教 育 目 次

—— 第九十九卷 第七号 ——

© 2000  
日本幼稚園協会

ある日.....(4)

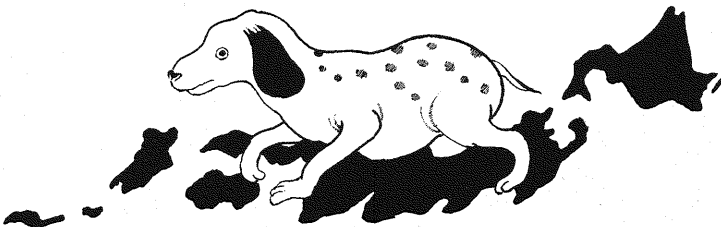
巻頭言 幼児と夏休み.....千羽喜代子.....(6)

子どものいる暮らし―男・夫・父

覚悟を決めて子どもの中に出てゆくということ.....松浦 浩樹.....(9)

保育の見直し―その二.....田中 朱美.....(18)

私が幼児教育を志した頃(9).....津守 真.....(24)





耳をすまして 目をこらして(4) .....宮里 暁美:(34)

老若男女共同参画社会の子育てを見通す(5)

―地域の連携における自治体の役割― .....金田 利子・永田 陽子:(36)

子ども時代と私(21) 子ども時代と私 .....蕪木 壽江:(44)

宇宙を感じる .....村井 利行:(50)

気になる .....高橋 陽子:(57)

表紙絵／田中 千尋

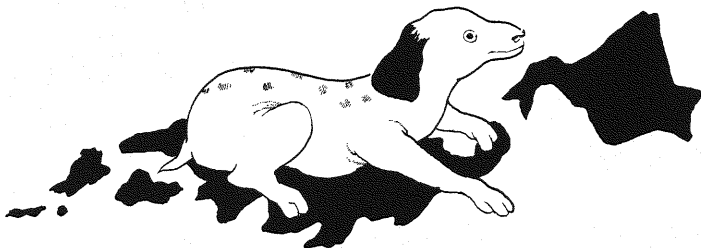
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「地図」

編集委員／田代 和美・田中三保子・高橋 陽子

編集部／仲 明子



# ある日

撮影・平野 清







## 巻頭言

# 幼児と夏休み

千羽喜代子



そろそろ各園では今年の夏休みの計画の具体案を考え始めている頃でしょうが、幼児たちはどのような生活を描くのでしょうか。

幼稚園教育における夏休みの意義についての説明を見つけることが出来なかったため、小学校教育における夏休みの意義を借りることにしよう。

現代学校教育学辞典（ぎょうせい、一九九三

年）では、次の五項目が挙げられている。

(1) 心身に必要な休養を取り、夏の特殊な条件のもとに健康の維持・増進を図る。

(2) みずからの生活の設計を立て、自主的・自律的な態度や生活習慣を養う。

(3) 常日頃の学校生活や学習活動では得られない体験をすることによって、個性を伸ばし教養を高





める。

(4)興味や関心を生かし、長時間をかけて取り組める学習活動を進めたり、日頃の学習を補ったり、深めたりする。

(5)家庭生活の中で、家族の一員としての役割を果たし、地域の諸活動に参加して、社会性を身につける。

子どもにとっても大人にとっても、共通していることは、休日という日は、日課や公的な規則などからの解放感や自由感のもとで、自分としての活動や生活ができることであろうが、夏休みという長期間にわたるときには、自他ともに、そこに或る目的性や有効性を期待するのもかも知れない。

この三月に卒業した斉藤有紀さん（大妻女子大学児童学科）は、卒業論文「幼稚園児にとつての『夏休み』の意味」に取り組み、幼稚園児にとつて、夏休みは、第一学期の心身の疲労の回復と第

二学期にむけての健康の維持・増進を図ることにあるが、夏休みの体験の何が第二学期の幼稚園教育に反映していくのか、そこから幼児の夏休みの在り方を考えようとの研究目的を立て、年長組クラスの幼児を対象に調査を行った。

その結果は、意外にも、現代の幼児の生活の実相を垣間見た思いであった。要約しよう。

①平常時と夏休みの生活時間を比較したとき、夏休みの食事時間は短くなっている子どもの方が多い。入浴時間は平常通りである。睡眠時間は平常時よりも長くなる傾向にあり、平均すると五七分長い。それは起床時間においても、就寝時間においても平常時よりも遅い傾向にある。遊びに要する時間は、対象児全員が平常時よりも長くなっており、平均三時間四七分、最大六時間、最小一時間三十分となっている。テレビ視聴時間は、八十パーセントの幼児が平常時よりも長く、平均一時間五六分、最大三時間三十



分、最小三十分となっている。

平常時幼稚園に登園している約四時間ないし五時間を、主に、遊び、睡眠、テレビ視聴に置き換えて生活していることになる。但し、テレビ視聴依存の幼児には、第二学期の行動に変化を期待しにくいことを加えておく。

②遊びにおいて、誰と何処で遊んでいるかについては、平常時に友だちと遊んだり、ひとりで遊んでいる幼児の半数が、夏休みには、きょうだいと一緒に遊んでいる。遊ぶ場所は、平常時は屋内で遊んでいる幼児も、夏休みには屋外で遊んでいるものが多く、開放的な環境での遊びを求めていることを知る。

夏休みの方がきょうだいで遊ぶことが多いとする傾向は、夏休みでは、各家庭の生活リズムがそれぞれ異なるため、近所の子どもとよりもきょうだいで——ということのようである。きょうだいとの繋りがより深められる機会とな

ることに注目しよう。

③夏休みの遊びにむけられた好奇心や遊びのアイデアの豊かさや自然体験などが第二学期の幼児の園生活の活動内容にどのように反映されていくかについては、以後、研究を積み重ねていかなければならないが、一つの観点は、子ども自身が夏休みの実体験を能動的に活かしているに置かれるのではないかと考えている。

先に、夏休みの意義について五項目を挙げたが、特に現代の幼児たちにとっては、夏休みは、親やきょうだいたちと深くかわるチャンスとして活かすために、家庭にあつて、親は、その実現のために力を添える必要があるのではないだろうか、夏休みの課題を提起する。

(大妻女子大学)



子どものいる暮らし——男・夫・父

## 覚悟を決めて

### 子どもの中に居てゆくつもり

松浦 浩樹

「パパなんかと遊んでもつままない」と言つて、日頃息子（現在五歳）が親しくしている男の子が休日到我が家に遊びに来たらしい。私は外出していたので、後になってその報告を妻から聞く。息子と遊ぶ事をそんなに喜んでくれる友達が息子に

できてよかつたと思う反面、「明日は我が身。いつか自分も息子から、そんな甲斐の無いことを言われてしまうのだろうか」と覚悟する。

一方で私はこの頃、妻から報告される息子達の話が実に面白いと思う。母親たる者、こういうと

ころを見ているものなのだったといった私との感じ方の違いを意識もするが、四六時中子どもと一緒にいて、こういうところを印象に残しながら、日々の子育ての糧にしているのかと参考になる。参考になると言うのは、職業意識が働いて、あまりよろしくないもので、とにかく面白いやら放っておけないやらで、夫婦の子育てで会議の尽きない話題になっている。また、妻の話と共に、日頃の息子の姿から私がダイレクトに感じることを含めて、新たに「子ども」を知ることも多くある。日頃保育の中でも繰り返し出て来う子どもの生の姿が、息子の姿を通じて、一味違ったあり方で私の心の中に映る。そのこと自体がまた、私が保育に出てゆく事を押し進めてくれる。

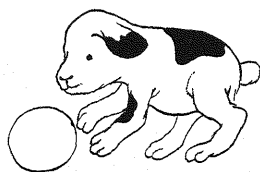
### 覚悟すべし

私は保育に携わるようになって八年、このよう

に妻から受けると同じような感覚を、他の保育者にも、もち続けている。

自分が面白いと思った現象を話しても、話せば話そうとするほど、自分でもつまらないと思う。でも、周りの保育者は、子どものことを語るに天才的な感性をもっている方が多い。時に、こんな事を「面白い」と思うものなのかと、むしろ自分の感性を疑いたくなる事もしばしばある。そうなれば、自分を磨こうと気合を入れて、ここ数年過ごしている。気がつくとも毎朝、保育に向かう前「さあ、今日一日がんばりましょう」と自分に気合を入れていく。

何をがんばるのかはともかく、そうやって保育に向かう自分を整えているような、どこか生活ス





ダンスの切り替えと言うか、自分の心や頭、身体全体のスイッチの入れ替えを無意識のうちにしている自分がある。

津守真先生ご夫妻の会話の記述を思い出す。

「私は子どもたちの中に出てゆくとき、きょうの一日を子どもとともに過ごそうと覚悟を決める。——略——そうでないと、しつかりと子どもと応答する気持ちが高ぶりがたう。——略——私の妻は、覚悟を決めて子どものところに出てゆくと言うのはおかしいと言う。このことで、ある時期、毎日議論したことがあった。」（「子どもの世界をどうみるか」NHKブックスP.118—119）

男性、女性の別にこだわるわけではないが、ただでさえ男性が幼稚園の先生をするということがピンとこない人がまだ多く、まるでそれで身を立ててはいけないうちでも言うかのごとく、「子どもと遊んで給料をもらってる」といって酒の肴にさ

れることがある。こういった一般的な印象が、ある覚悟を必要とさせている心的側面もあるように感じている。

また一方で自分の身の回りの子どもの生活にかかわる女性（妻、保育者、子どもを通じて出会う母親）は、男の私から見ても、ごく自然に子どものいる生活に入っていくように見える。「入っていく」という意識がそもそも違うのかもしれない。まさに「子どもとの生活の中に投げ込まれていく」ことを自然に生きられる。そのような姿を見て感じるとき、父親として、というよりは、男性保育者としてのアイデンティティーが何であるのかを揺さぶられ、考えさせられる。

その時その時に子どもと共にいて、彼等の気持ちを感ずたい気持ちが強ければ強いほど、自分の心と頭の引出しを一度全て閉じて、子どもと交わすことばの引き出し、遊ぼうとする気持ちと身体

の引き出し、子どもの心の引出しを開き直しているような気がする。こう表現すると、何か大袈裟な事のように自分でも感じてしまうが、このようなある種の覚悟を「さあ」という一言で、保育中何度も一瞬のうちにやっているような気がしている。そういった覚悟をもたないと、子どもとかわる、その気持ちがまさに「浮き上がってしまふ」のを何度も経験した。私の身の回りの女性には、実にその辺が自然にでき、保育者としてはうらやましく思ったりする。それだけではなく、もっと根本的なところで、子どもにかかわることが、自分の人生の中に当たり前に、しかもしっかりと組み込まれているのだということを知らされる。私は保育者として、ある覚悟をもって保育に携わってゆく中で、その心の自然さが、身に付いてゆくのであろうか。

### もつれた糸と覚悟

一九九八年度、私は保育に携わって七年目、初めて年中組（四歳児）を担当した。以前より先輩の保育者から「年中の子がどのような生活を送るかは、発達の要だ」ということを教えられていたが、この時期をどのように子どもと潜り抜けていくか、頭で理解しただけで、実感を伴ってはいなかった。その後一九九九年度、また、長男も四歳、五歳への移行期にあった。この二年間を通じて、どうも訳の分からない、混乱した心をもつ子どもの現実にくくつも出会った。自分でもどうしてよいのか分からない、どうしようもなく葛藤している彼等の前で、子どもにかかわる者としての自分をどのように向き合わせるのか、糸口が掴めない、私の方こそ混乱する時期があった。このことは私自身、とても衝撃だった。

一九九九年の冬のある日、家族で公園に出かけた時の出来事。もうすぐ五歳になるうかという長男は、この時期、なんでも一人でやってみようとするが、ことごとく自らの前に立ちはだかる壁にぶつかっては挫折する経験を何度も積んでいる。

この日は、幼稚園で出会った友達の刺激を受けて、チャレンジしようと縄跳び、ローラーブレード、そして風上げをしようと意気込んでいた。

ローラーブレードは怖さが伴うので、簡単にはいかないことは彼が十分承知していて、「今日はここまで」といった感覚をもってやめてしまった。

その後の縄跳びと風上げには、私は参ってしまった。縄跳びは一回は跳べるが、どうしても、二回三回が跳べない。私も励ましたり、「こうする」

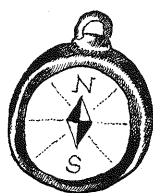
「ああする」といって、なんとか跳べるようにしてやりたいと願ってかわかる。彼は泣きべそをかく。その悔しい気持ちを「ほら、できないじゃ

ん」とまるで私が悪いかのように八つ当たりすることでも表した。初めの内は、意識を変えてやろうと、あの手この手を工夫するのだが、ついに私も絶えられなくなって、「じゃあ、風上げやろう。そして、またやりたくなったら、縄跳びすればいいじゃないか」といいながら、方向を変える。

今度は風上げ。この時期の子どもなら、糸を二、三メートルのばして走り回る方が楽しいはずだが、彼は小学生がやっている風上げを見て、その通り三、四十メートルのばしてやりたがる。毎日公園で過ごしている彼等は、妻という時は二、三メートルで走り回って満足しているが、休日、私と過ごす時には、このよ

うな難題をぶつけてくる。

これも父親冥利に尽きるところで、一緒にやってみる。風が十分に上がりきる



までの速さも無く、風はすぐに地面に落ちてしま  
う。二、三回すると、彼は癇癩を起こす。それで  
もなんとか励まして、もう一度やってみる。やは  
り上がらない。彼は悔しさのあまり、その風糸を  
ぐちゃぐちゃに絡めてしまう。私も、気持ちがあ  
へトヘトになり、「なんで、こんな事するんだ」と  
怒鳴りつけ、複雑にもつれた糸の部分の切つて繋  
げようとしたところで、その様子を見かねた妻が  
「私がする」といってストップをかけた。まさに  
私が「切れた」のだった。

妻は息子と共に地面にしゃがみこんで、解くの  
は不可能と思えるくらい複雑にもつれた糸を、ひ  
とつひとつ丁寧に解きながら、息子にあれこれと  
話しかけている。息子は始めこそ、ぶつけようの  
無い悔しさを涙で表現していたが、徐々に妻の話  
にうなずき始め、長い時間かけて気持ちを立て直  
していった。そして妻によって再び一本に解かれ

た糸を息子は糸巻きに巻いて二、三メートル残  
し、再び、いつもの風上げに走り回った。

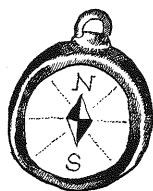
私はその傍らにいて、その妻と息子の様子に  
ショックを受けた。私などつい「息子と思うと、  
情けない」という思いにとらわれ、エネルギーが  
沸いてこないのだが、妻には「よくぞ、ここま  
で、付き合うな」と改めて母性なるものの強さを  
感じるのだった。その夜、冷静になってこの事を  
考えてみる。考えてみるというよりは、子どもに  
かわる仕事をしている者として、このことが  
ショックで頭から離れなかったのだ。それは、二  
年前に初めて四歳児クラスをもち、その子どもた  
ちのもつれた心に上手く向き合えなかったという  
自分自身が抱いた課題と重なっていた。

何がショックだったか。それは妻が、息子と地  
面に座して、糸がもつれた部分を一つ一つ解きな  
がら、向き合っている行為とその背景にある気持

ちそのものだった。切って繋げる事は合理的なようにも思える。とっさに私などはそう考えて、切ろうとした。妻は無意識だったが、そこにストッブをかけた。妻がこういつた行為を無意識と言うか、ごく自然に当たり前のこととしてできてしまうこと、そのものがショックだった。今になっては、それをありがたいと思う。

糸のもつれた部分を切って捨てて、繋ぎ合わせることは簡単だ。しかし繋ぎ合わせた結び目は、「糸の傷」となつて残る。糸が地面に落ちた時、その傷に枯草なども絡んでくる。しかも全体の丈は短くなる。夜、寝ながら、そのような事を考えた私は、これは糸の問題ではなく、人間の心に向かおうとする心性そのものであろうかと感じた。もつれた糸は、息子の心そのものだった。私にストッブをかけ、じつくりと共に座して、もつれた心を解く妻がいなかったら、さらに「情けない」

という気持ちのみで、そのもつれた心に向き合うことなく、解決されずにそれを切り取ろうとする私のみだったら、あの時どうなっていたらう。思えば彼が三歳から四歳にかけて、親と一緒にすることで色々なことを身に付け満足していたが、ある時から「ボクがやる、ジブンでやる」、「パパ、見て、見て」という事が増え、夫婦共に、こういった息子の育ちをただ単に頼もしく思つて過ごしてきていた。しかし「自分でやる、ひとりやる」ことが増えてきた分、葛藤しなければならぬこと、今までのように簡単にはできないことも増え、その現実を彼自身では背負いきれなくなつてきていたのだ。当時、生活の至る所で私にも妻にも何か訳の分からぬ様子で泣きべそをかいたり、泣き喚いたり、そうやっ





て、悔しさや怒りを表していた。混乱し、グチャグチャにもつれていた彼の一本のまだ細い心の糸を、妻は息子と共に試行錯誤しながら解き、新たな前進力を与えている。それから数ヶ月した今、彼は、夫婦で「二皮剥けたね」と話をするほどに、何か安定した気持ちで、自信をもって、いろいろなことに挑戦しようとしている。

たかが風采ごときを大袈裟に表現したが、私にとっては、子どものいる生活を考える大きなヒントになった。私の保育をある期間、観察してくれた研究者から「男性、女性の違いというわけではないんだけど、私の主人もそうなんだけどね、松浦さんも、子どもとのかかわりが階段状なのよね。必ず、ワンステップ欲しいと言うか、ハッキリさせたいと言うか。保育って、もっと引いたり緩めたり、混沌としたところがあるんじゃない」という言葉を頂いた。私は、これまでを振りか

えって、この言葉を真摯に受けとめたいと思っている。父親や男性保育者に子ども自身が求めている表層の部分（例えば、ダイナミックさなど）に張りきり過ぎて、ついついその子の技術的な側面を押し進めてやろうという邪念や根性論が付きまとうってしまう。子どもの心の育ちに意識を立ち戻らせねばならない。その意味でも、私は子どもにかかわる前に「覚悟」を決める必要がある。私はこの事を考え始めてすぐに、津守真先生の子どもの描画に関する「もつれた糸玉から中心のある渦巻きへ」の記述を思い起こし、読み返すと、先輩の保育者の「四歳児は発達的要達」と言われる事と共に、改めて一言一言が身に迫って感じられるようになった。

津守先生はかわった子どもA子の描画の変化と心の変化を詳細に観察され述べられている。「ごく小さい時から、A子は、大人には理由がわ



# 保育の見直し — その二

## 少子化の時代、園児激減の年を迎えて

田 中 朱 美

はじめに

九十年代前半、私達の園にとって深刻な問題が起きました。それは、一九九四年度の園児募集で、大幅に定数を割ってしまうという園児数激減の事態に直面したのです。

けれども、来年度から入園してくる子ども達や元町幼稚園を選んでやってくる保護者がいることを考えると、いつまでも同じ場所で足踏みしてはいられないと、皆で落ち込んだ気持ちをふるいたたせ、前向きな気持ちで歩みはじめました。

そこで、来年度に向けての話し合いがもたれまし

た。

「少子化の時代とは言っているが、他の幼稚園では定数を取っていると聞いている。ただじつと園児が集まるのを待つだけでなく、こちらから歩み寄ることが必要なのではないだろうか」

「保育形態をかえてから十六年になるが、子ども主体の保育が定着するにつれてこの保育の中身や良さを伝えていく機会が少なくなった。子ども主体の保育の大切さや、成果などをもっと親たちへアピールしていくべきではないか」

「今の世の中、高学歴の親が多く子どもに対して高い理想を抱いている。以前に増して幼稚園選びをする目も厳しくなってきた。そんな親達へどのようにこの保育の良さを伝えればいいのだろうか」

など、親側のことを考えた意見が多く出されました。そして、幾度も話し合いを重ね、出しあった案を慎重に具体化していきました。

## 『幼稚園の良さをどう伝えていくか』

### 1 未就園児の保護者へ

#### ―入園説明会を考える―

幼稚園選びをする親に対して、幼稚園の中身や良さを伝えるための「入園説明会」。その内容を決めたり進行していくのは、ごく限られた職員のみでした。

しかし、園児数激減がきっかけになり、職員間から疑問の声があがりました。園児募集の一番大切な日を一部の職員に任せていいのだろうか。もつと自分達の問題として考えていくべきではないか、などの意見が出され、その後、入園説明会の内容検討の際に職員全員の意見が取り込まれていくようになりました。

以前の説明会の主な内容はミニ講演会に近く、例えば今の世の中で起きているさまざまな問題を取り

上げ、子どもにとって親にとって何が必要なのかを知らせ、そこから幼稚園で大切にしていることやこの保育で育つことなどを話していました。

例えば、核家族の問題や家庭崩壊など。

しかし、園児数激減という問題に直面し、今までの幼稚園の方針を一方的に投げかけるだけでは親たちの心は動かせないのだということを痛感しました。そこで、それまでの親をなんとか説得しよう、この保育の良さを分らない人はいないはず、などの考え方を改めもっと親の気持ちを汲み取ったり、親の立場にたって考えていくことを心掛けていくようにしました。

「幼稚園に入れたらどんなことができるようになるのかしら?」「先生は、どんな風に接してくれるんでしょう?」「うちの子、手を出しやすいくから友達とうまく遊べるかしら」「三歳から入れたほうがいいって言うけど、まだ親元の方がいいんじゃないか



しら?」などお母さん達の抱いている不安や戸惑いの気持ち、素朴な疑問などをとりあげて説明会の内容をそれに合ったものにしていきました。

さらに、内容がマンネリ化にならないよう、前年度の親や子どもの様子をふまえ、今年は説明会でどんな話をしたらいいのだろうか、という話し合いを職員全員でするようにもなりました。例えば、スライドを使って幼稚園の一日の流れや行事、保育者のかかわっている場面などを紹介したり、現場の保育者から子ども達との関わりを通じてどのように一人一人を大切にしているかなど、具体的な保育の話を



したこともありました。

### ―体験入園の始まり―

保育を見せる、保育を体験してもらう

説明会の中だけで、元町幼稚園の保育を伝えるには、限りがありました。また子ども主体の保育や、一人一人を大切にしていることなど、入園してからでないとその良さを理解してもらえないことが多く、私達はもどかしさを感じていました。そこで、実際の保育を見てもらったり体験してもらうのはどうだろうか、という今までにない新しい発想が生まれたのです。

体験入園に参加した親子が、保育者の実際の関わりを見たり体験したりすることで一人一人にあった保育を心掛けていることを実感し、それぞれの親子が参加して良かったと思えるためにも、少人数のあたたかい輪の中で行えるような内容にしました。ま

た保護者からの質問にも丁寧に答えていくよう心掛けて、体験入園のやり方や内容は次のような形になりました。

### 〈体験入園〉の一日

- ・保育室の中に、遊びのコーナーと親子で集える場所をセッティング。
- ・はじめに、親子で簡単な手遊びなどをして子ども達の気持ちをほぐす。
- ・遊びのコーナーを紹介し、子ども達を誘う。子ども達が選んだ遊びがより楽しくなるように援助したり、また一人一人の心の状態にあわせて接する。
- ・子ども達が遊んでいる間、親側に子どもの様子や保育者の関わりを見てもらい、保護者担当の職員が質問を受けていく。
- ・遊びの時間のあと、保育者が絵本の読み聞かせを

する。

最後に、子ども達とかかわった保育者がその日の遊びの様子をカードに書いて、在園児が作った手作りおもちゃと共にプレゼントする。

体験入園の他にも、保育見学日を設け在園児の保育の様子を見せて場面場面に応じた説明と、親からの質問を受けました。

### ―入園前の親子の支援―

このように、以前にまして入園前の親子と接する機会が増えたことで、母親の抱えている育児の悩みを相談できる場が少ないことや、同年齢の友達と遊ぶことが少ない子ども達の体験不足といった現実を知りました。そこで、未就園児の親子を対象にして、幼稚園の一部を解放し、一九九五年『あつぷる広場』を開設しました。

あつぷる広場は、月二、三回の割合で開かれてい

ます。責任保育者が子ども達の保育や母親の育児の相談を担当し、入園前の親子が触れ合い、共に育ちあうことを目的としています。この支援活動を通して、元町幼稚園の保育をより多くの方々に知ってもらうことができました。

## 2 在園児の保護者へ

―子どもの成長を通じて幼稚園の良さを

理解してもらうために―

これまで、入園前の保護者へのさまざまな啓蒙の形や内容を報告していましたが、実際、幼稚園に通っている保護者がどのくらいこの保育の良さを感じ取っているのかということも大変重要な点でした。

やはり、保護者がこの幼稚園で良かったと思えるのも、子ども達の姿や成長を実際に目にすることができたり、実感できる時ではないでしょうか。

そこで私達は、入園後も、よりこの保育を理解し

でもらうための努力を続けていきました。特にこの保育は、遊びや人との関わりの中で子ども達が成長していくため、子ども達と関わりあっている保育者でなければ分かりにくいことが多く、またその成長を見抜く目も必要でした。

そこで、子ども達の成長を目に見える形で親に伝えていくために、諸行事で子どもの成長を伝えていくのはもちろんのこと、日々の保育記録をもとに一人一人の成長を文章にして、毎学期ごとに保護者に配布することにしたのです。

その名を『成長の記録』とし、文章の他に時期や伝えたい内容に応じて写真なども載せていきました。また、親側からも、感想や親としてふりかえって思うことなどを書いてもらいました。

## 今後の課題

―時代の流れを読み取りながら―

園児の激減というマイナスの事態を「もう一度考

え直すチャンスがきた」とプラスに考えて歩み始め、今日までやってきました。努力のかいあって翌年から定数をしつかり確保できるようになり、在園児の保護者からの信頼も徐々に得られるようになりました。

私達は、これからも子どもと親のニーズを共に満たすことのできる保育を目指していきたいと思えます。しかし、街中の小規模幼稚園が二つのニーズと共に充実させていくことは、決して容易なことではありません。実際、保護者のニーズに応え続けることによつて、保育者をはじめとする職員全体の精神的、労働的負担が許容量をこえつつあります。今後は、保護者のニーズにこたえ続けるだけでなく、変化する時代の流れを読みとりながら今何が一番大切なかを考え、私達がやるべきことを選択しながら前進していくことが課題だと思います。

(横浜学園付属元町幼稚園)



## 私が幼児教育を志した頃(9)

津守 真

昭和二十四年には、私はすでに幼児の発達と教育の仕事に入っていた。

その出発点で、はからずも障碍をもつ幼児と出会った。当時は精神薄弱児とよばれ、何も分からない特殊な子どもと考えられていた。その呼び名はその後、精神発達遅滞児、知恵遅れ、障害児、などさまざまに変わり、現在は知的障害児と言われている。私はいまは「障碍」と書く。「害」は害毒の害であるが、「碍」は、さまたげになる石という意味である。妨げになる石を目から取り除けば障碍ではなくなる。あれから五十年の間に私はこの子どもたちに教育されて、いまは疑わずに「障碍をもつ子ども」と書く。コメニウス、ペスタロッチ、フレーベルの幼児教育は、この子たちを含めたすべての幼児のためのものである。



### 障碍をもつ幼児のための特別保育室の準備

障碍をもつ幼児のための特別保育室を私が始めたのは、数えると今から五十年前のことであるのに、私はそこから発展した養護学校と現在もかかわっているので、特別保育室の開設はまるで昨日のことに感じる。その頃の幼児はいまや五十歳を越え、いまでも交わりをつづけている親子も少なくない。その間に社会の考え方、行政の指導方針、専門家の考えも幾度変遷し、それが親子の運命を変えてきたことを思うと、現在もこの仕事の原点に立ち返って考える必要がある。

私が愛育研究所の特別保育室を再開したのは昭和二十四年六月八日だが、そこに至る一カ月の間に私の身邊で起こっていたことを私の日記から引用しながら、解説を加えたい。

昭和二十四年五月十九日（木）

「朝寝坊をしているところを、心理学の友人のT君に起こされ、今日面接する子どもについて打ち合わせをした。いつもより遅くに研究所に行き、一人の乳児をみた。この子は一月半ほど体重が増加しないが精神発達はノーマルである。この後、身体的精神的にどう変化してゆくか興味深い。間もなく五歳六カ月の男児のMさんが来た。聡明に見える可愛らしい子で、挑むように私の顔を見て足を踏み出し、声を出す。幼稚園で他の子と遊べないのでみてほしいと母親が連れて来たのである。前回母親に頼ん



でおいた家庭の記録と幼稚園の記録と、製作品をもつて来てくれた。発達調査の結果は、発達年齢三歳六カ月である。この子の言語の異常は知能からくるのか、運動機能あるいは社会性の遅れからくるのか疑問をもった。つづいて双子のTさんの母親が来て、特別保育室の申し込みをした。母親の熱意に動かされるとともに、今後の責任の重大さを痛感する。」この頃は教育相談はどこにもなかったので、心理学の友人たちはよく愛育研究所に集まっていた。「言語の異常は知能からくるのか、運動機能あるいは社会性の遅れからくるのか」と記しているが、いまだったら自閉症と診断されただろう。当時は自閉症という語は未だなかった。「夜、岡部弥太郎先生宅を訪問。西本脩さんと一緒に英文翻訳の手伝いをする。その帰りに高等学校の友人に出会い、同級の真鍋君の戦死の公報がはいったことを聞いた。感無量。」

昭和二十四年五月二十日（金） 雨

「精神薄弱児施設T学園に、研究所のスタッフ数人と見学に行く。雨が本降りになった。暗い感じを受ける収容施設である。もつと良い教育の場が考えられねばならない。保母さんが貧弱である。そのことについてスタッフと話し合いながら帰った。私は大きな目で見る心が欠けているとスタッフから批判された。もつと大きな目で見るならば、人の悪点は消えて良い点が浮かび出るはずである。夜、コルヴィヌス『発達障害児』第二章を読む。」精神薄弱と診断されると、この子たちは結局は収容施設に送られるのかと思うと、私はがっかりした。こういうのとは全く違う考え方が作れな





いかと考えた。私がやろうとしていた特別保育室は、一番陽当たりの良い、明るい部屋にしたいと私は主張した。幸いなことに、私共の特別保育室に予定されていた教養部長室は三階東南の角部屋で、日当たりの良いバルコニーがついていた。

昭和二十四年五月二十一日（土）

「生後五カ月の乳児の相談を受け、発達検査をした。九カ月早産で、身長と胸囲が普通より小さい。神経質な印象を受けた。午後は日比谷のCIE図書館に行き、カーマイケルのマニユアル・オブ・チャイルド サイコロジの中にもドルが書いた『フイーブルマインディッド（精神薄弱児）』の章を二十ページ程読んだが、精神薄弱児教育について一層悲観的になってしまった。少しく疲労を覚え、何もする気がしない。明日の矢内原先生の聖書講義に期待を感じると共に恐怖を感じている。」

当時は児童心理学の書物でも精神薄弱児というと、普通の子どもとは違う特別の心理があるとの考えが一般的で、その分野に踏み込もうとしている自分を考えると、気が重かった。接すれば可愛い幼児なのに、違う種類の子どもとは私には考えられなかった。

昭和二十四年五月二十二日（日）

「今井館聖書講堂で矢内原聖書講義は『心の悪』という題目だった。

恐怖は善き行いを萎縮させ、感謝は善き行いを刺激する。神は愛であり、喜びの神であると言う方が信仰を生産的にするという趣旨の講義だった。『小事に忠なる者は



大事に忠なり』という聖書の箇所、矢内原の注釈である。

午後はいつものように日曜学校で子どもたちと遊んで心を洗われた。」

昭和二十四年五月二十三日（月） 雨

「朝から日比谷のCIE図書館にゆき、マニユアル・オブ・チャイルド サイコロジの『フィープルマインデッド（精神薄弱児）』の項を読了。たいして啓発されるものはなかった。それよりもゲゼルの新刊の『ディヴェロップメンタル・ダイアグノシス（Developmental Diagnosis）』に興奮した。彼の数十年にわたる苦心の結晶である。このような仕事に対する情熱が駆り立てられる。こういう仕事を私もしたいものだ。昼少し前に研究所に行き、昼食後幼稚園で一時間はかり遊ぶ。夜、コルヴィヌスを読む。落ち着いた面白い書物である。」ゲゼルの研究は知能検査とは異なり、乳幼児の発達の細かな観察に重点がある。後に私は日本の子どもの生活場面での観察による「乳幼児精神発達診断法」を著したが、戦争中もたゆまずに続けられていたゲゼルの研究に触発されたのである。そのひとつひとつの行動の意味を私が考えるようになつたのは更に後である。

昭和二十四年五月二十四日（火） 曇ったり晴れたり

「午前中、渋谷区役所と赤坂区役所を回り、昼に研究所に行く。今日は一日こうして過ぎた。特別保育室の開設期日は迫ってくる。」特別保育室開設にあたって、区役所で就学猶予、免除の児童名簿を調査することを私は命じられた。経営の見通しのため



にはそれが必要だろうが、いま教育相談に来た子どもたちが通う幼稚園がないのだから、その切実な要望に答えることが緊急だと私は考えていた。発達が遅れているからといって、幼稚園から断られるのはおかしい。そういう事実に出会うと自分が拒否されたように感じてしまう。幼児はたちまち大きくなるから、制度がどうであれ、この子が幼児のうちに、幼児にふさわしい保育の場を用意しなければならないというのが保育者のセンスだと思う。

昭和二十四年五月二十五日（水） 快晴

「朝、スキッピー（犬の名前）について来られて迷惑する。Mさんが研究所に来て、午前一杯かかってしまった。母親はきわめて熱心で、特別保育室に申し込んで行った。ますます責任を感じるが、張りが出てきた。午後から赤ちゃんが来た。十カ月だが、発達指数65である。身体発達は二カ月以上進んでいる。特別保育室の経費を計算したが非常に苦しい。最初から難航である。」

スキッピーは、接収されていた私の家に新しく住んだ米国陸軍大佐ドナルドソン家で飼っていた犬である。私の家から愛育研究所まで、当時はバスもなく、片道三十分以上歩いて行くよりほかなかった。スキッピーはよく私のあとをついて来て、困らせていた。

昭和二十四年五月二十八日（土） 曇り後晴

「午前中に二人知能の遅れた子どもをみる。ひとり九歳、IQ 56。父親が連れて



来た。何とかならないかと訴えられた。大和田小学校を紹介し、小児科に回した。もうひとりとは四歳三カ月で、I Q 75である。」この頃、都内の特殊学級はこのほか、神竜小学校、金竜小学校、その他一、二校があるのみだった。勿論、養護学校はまだなかった。

### 日本保育学会第二回大会

昭和二十四年五月二十九日（日） 晴

「今日は、日本保育学会の研究発表会に行くか、あるいは矢内原先生の聖書講義に行くか、前から迷っていたが、結局保育学会に朝から行つた。私は一生懸命に集中して聞いた。いろいろの発表を聞き、保育ということの性格がだいぶ分かったように思う。だが実際にこういう仕事をしようとしている自分を考えると、学問とは縁遠いように思えて、自分が惨めに感じられたのは何故だろうか。しかし夕方までじつくりと聞いているうちに、だんだんに元気を回復した。学問と矛盾しない道もある。それはやり方によるのだ。子どもは心理的に社会的に生物的に、また教育の対象としてあらゆる面からみてゆかねばならない。終了後、会場の整理を手伝って、お茶とお寿司を御馳走になり、西本君ほか数人としゃべった。帰途牛島先生と一緒にになった。」

この日は第二回日本保育学会大会で、会場は東京女子高等師範学校―現お茶の水女子大学―附属幼稚園遊戯室だった。発表数は七で、参加者は遊戯室に入る位の人数



だった。いまでは考えられないくらい、保育というのは一段と低く見られた時代だった。そういう風潮の中で、その分野に入ろうとしている自分が惨めに見えてきたのだと思う。しかし、やり方によっては学問と矛盾しない道があると直観的に考えたその直感は、保育にかかわる学問の遍歴をいくつも経て来た現在、間違っていないかと思う。あの頃の実践者たちは、いま思うと立派な保育をしていた。当時の私には、実践の中から生み出す保育学が未だ見えていなかった。

### 特別保育室開室

昭和二十四年六月八日（水） 雨

「午前中保育の準備。午後から第一回保育。」

在籍者は四人だったが、この第一日には双子の二人が欠席だった。こうして、週二日、研究室での保育が始まった。子どもの数はじきに増えていった。三階の研究室では不便なので、数カ月後には階下の幼稚園の保育室を週二日、午後使わしてもらうことになった。この間のことを思い出すと、保育の実践としては現在私がやっているのと大差はなかったように思う。すぐには部屋に入らない子どもがいて、私はその子と並んで、子どもがほんのわずか足を前に出すと私も子どもの動きに合わせて足を出し、少しずつその子は部屋の真ん中に歩いて来た。そんなとき、保育経験のあるスタッフは、部屋に入るときには靴を履き替えさせなければいけないと主張した。靴を



履き替えさせているうちに子どもは気持ちが変わって動かなくなることは自明なのに。最初からこんなコンフリクトがいくつもあった。

このようにして、ともかくも二学期、三学期と過ぎて、昭和二十五年三月二十五日に、お客様を招いて一年目の修了の会をした。心理学の友人たちが何人も来てくれた。東洋英和女学院からスクールトン先生が来られて、これは日本の教育の基礎となる仕事だと励ましの言葉を述べてくださった。愛育研究所長の斎藤文雄先生は、文化国家日本にふさわしい仕事と励まされた。

あの初期の時代にこの仕事に関心をもった一握りの人たちには、この子たちが幼稚園や学校から拒否されるという、こんなことがあつていいのかという怒りがあつた。また、この子たちのために、保護する場所を作りたいという親心と熱意があつた。障碍をもつ子どもの仕事のその後に言及するといくら紙数があっても足りない。これまで私自身いくつも書いてきたし、日本保育学会「保育学研究」第三十六巻第一号「展望―幼児保育から見た障碍の意味とその歴史の変遷」に概要を記したので、あわせて読んで頂きたい。

### 倉橋惣三先生宅訪問

昭和二十五年五月九日（火） 晴

「倉橋先生宅訪問。」かなり以前から、愛育研究所小児科の平井信義さんと私は乳児





室で一緒に仕事をしたり、語り合っていた。平井さんは私に倉橋先生に会ったことはあるかと尋ねられ、今度一緒に訪ねようと約束していた。それがようやく実現し、中野駅に近い千光寺町のご自宅を平井さんと訪問した。この後私は何度もお宅を訪ねるようになったのだが、倉橋先生はいつも茶系色の和服に兵児帯で、温顔で迎えてくださった。この最初の訪問のとき、私は特別保育室のことを話したと思う。先生はそのことに非常に関心を示された。私は矢内原先生のことなども話した。先生自身内村鑑三の聖書講義のメンバーであったこともあり、そのことにも話は及んだ。その日の印象を私は日記に次のように記した。

「この子どもは、この子どもだ。私は私であり、あの人はあの人。この人はこの人。あなたはあなたである。将来どうなるか、そんなことは分からない。神様の御手に委ねなければならぬ。」先生がこのように言われたのかどうかは確かでないが、先生はひとりひとりの人を独自の人格として接せられた、その印象である。

先生は障碍をもつ子どもに深い関心を寄せておられ、この年の秋に私が小さな保育室を建築したとき、自分はいいたことはできないがと言って、五円を紙に包んでくださった。当時の五円は大金である。私はそのお金で靴箱を買い、カルテボックスを大工さんに頼んで作ってもらった。先生の句に「はいれない子にも薫れや梅の園 園丁」というのがある。こうして、倉橋惣三先生と私との間の長い交わりが始まった。

# 目をこらして (4)



植え込みを掘り返した泥場（なんて言い方ありかな？）

で、だんごを作って遊んでいた時のこと。

お弁当の時間が追って来たので、「もう片付けだから、とっておきたい物があつたら、こわれないようなところにおいておくといいよ。」と、その辺にいる子たちに呼びかけていると、J君が立ち上がって私にきいた。

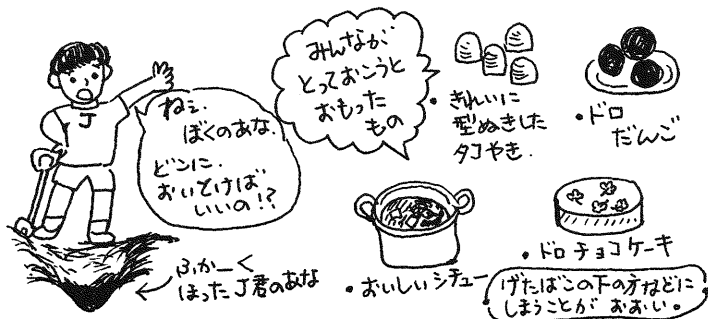
「ぼくのあな、どこにおいとけばいいの？」

\*

ちよつと頭が大きくて、駅の名前をととてもよく知っているJ君は、名言作りの名人。植物園で、木の間の道を通りながら、木を触って「これが、しょくぶつっていうものだ」と一人つぶやいたり……。

親子遠足に行った時のこと。昼食後の、のんびりしたひととき、ふと気がつくと、一人てくてくと歩いているJ君がいた。深緑の美しい木々に囲まれたその道は、どこまでも歩いてみたくなる道だった。私も、てくてくと歩き出す。しばらく歩くと、J君に追いついた。二人で黙って歩く。

右に曲がる角が見えてきた時、J君が言う。



絵と文 宮里暁美 (目黒区立ぶどう幼稚園)

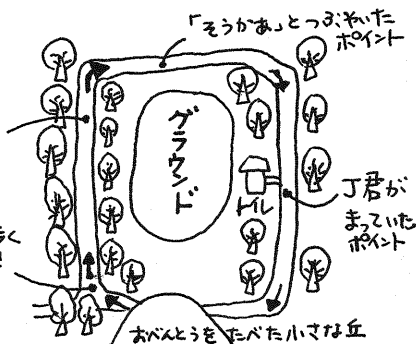


# 耳をすまして



「どうなるん  
だろうと、  
丁君がつか  
いたポイント

一人でく々と歩く  
丁君を発見!



「どうなってるんだろうねえ。」「どこまでも、どこまでも  
行きたくなるんだよね」と私も言う。

角を曲がると、道は、午前中遊んだ広いグラウンドをぐる  
り取り囲んでいたことがわかった。

「そうかあ。」と、つぶやく彼。

そうして、ぐるっと回つてもとのところに戻る途中、私  
がトイレに寄る。「先に戻っていいよ」と言ったのに、  
出てみると彼は手すりに寄りかかり下の草むらをのぞいた  
りして待っていてくれた。私は、何だが久しぶりに恋人と  
散歩しているような気持ちになった。

\*

そんな風に、とびきりの時を共にしたことのある丁君の  
一言。「ぼくのあな、どこにおいとけばいいの?」

その一言を聞いた瞬間の「!」という間。あれは、最高  
の間だった。

子どもの言葉に耳をすます。

予想外の言葉に出合って、子どもの考えに触れて、一瞬  
「!」と時が止まる。今日はいくつの「!」に出合った?

# 老若男女共同参画社会の子育てを見通す(5)

## ―地域の連携における自治体の役割―

### 幼児相談室をもつ東村山市の場合から

金田 利子

永田 陽子

#### はじめに

一回目の基調提案では、競争社会から共同社会をめざすことのなかで子育てもみんなのものとなっていくのではないか、また逆に子育てのつながりを求める中

で、老若男女共同参画社会への可能性が拓かれるのではないかという考えを展開した。二回目と三回目は地域での子育てとかわる関係づくりについて、また、四回目には生涯発達のふるさとして人間発達を支える保育園・幼稚園の役割についてとりあげた。

これまででは、一部に行政との協力関係も含まれるがほとんどが住民や園の自主的な取り組みについて見てきたが、今回は、地域の連携における行政の役割に焦点を当てる。

育てにくい子、障害が疑われる子などについての相談や子育て支援については、多くの自治体において、健康保健センター等を中心に何らかの施策が講じられている。しかし、幼児専門の相談機関を持っているところは少なく、全体としてみると、連携の中核を担う場として公的な機関と他の活動との関係が必ずしも十分とは言えない。

そうした中で、日本のすべての自治体をきちんと調査したわけではないが、自治体における取り組みの経験交流等のなかでとらえたとき、幼児相談室を持つ東京都下の東村山市（人口約十四万人）の施策は先進的ではないかと思われる。

そこで、ここでは、東村山市の幼児相談室において、長年、専門家（非常勤職員）として実践してこ

れた永田陽子氏に、東村山市の施策の姿を報告して頂くことにした。

### 東村山市幼児相談室の設立と概要

幼児相談室は、〃人口十万に對して一つの相談室を〃との児童精神科医、高橋彰彦の『地域ケア』の構想の基に、一九七七年に設立された。地域ケアとは、一つの機関が親子に必要なすべての役割を担うのではなく、地域にある機関が相互に連携を取り、役割を補完しながら必要な援助を提供しようとするものである。

最近のことばで言えば、〃ネットワークに基づく援助体制〃とでも表現できよう。地域全体でとらえた時に乳幼児に必要な様々な機能が整っており、そのキーとして機能する役割を担って幼児相談室は開設した。運営は、市から委託を受けて市社会福祉協議会がしている公設民営の施設である。常勤の職員が四名（臨床心理士が三名、医療職が一名）、非常勤が三名（全員が臨床心理士）が日常の相談などの仕事をしている。ほ

かに必要に応じて診察・スタッフや保育園や幼稚園などへ訪問してのスーパervァイズなどの役割をとる専門相談員がいる。専門相談員は、児童精神科、小児神経科などの医師、臨床心理士、心理学・障害児教育などの大学での研究者などである。

対象は市民で幼児を持つ家族で、料金は無料である。普段着で気軽に相談ができることが地元にある強みである。また、常設なので、利用時間はかなり融通をきかせることができるし、地域の情報を把握しており、利用者のニーズに沿った支援が取りやすい。

### 相談室の役割

市報を見たり、他機関から紹介されるなどで相談室を訪れた親子に対して、相談室では親の心配をまずは聴くことから始める。並行して子どもとのプレイを通して、子どもの心身の健康な発達のために何が必要かを把握していく。その場しのぎの問題対応ではなく、親や子が主体的に自ら対処していく力が持てるよう心理

治療的かわりを大切にしている。従って、相談は一回で終わらず、月に二回位の頻度で長期間継続する場合が多い。

相談を継続する中で、医療機関や教育機関など必要に応じて他の機関を紹介することが出てくる。そのときに各機関の特徴を把握しておき、利用者のその時の状態や要求に応じた地域の適切な機関につなげていく。人は新たな場所に行くのは不安が伴うものである。何らかの心配を抱えながらのことであれば、なおさら不安は高まるであろう。その親子が納得し信頼して必要な機関につながるには、両機関のスタッフが親子の心配や問題に配慮しながら橋渡しをしていく姿勢が望まれる。

紹介先を伝えるだけではなく、親子が必要な機関にしっかりと結び付くまで、どこかの機関がキーとなり機能するわけである。それには、スタッフ同士が地域ケアの考えを了解しあうこと、そして普段から相互にコミュニケーションをし続ける姿勢を持つことなしに

は利用者に適切な援助を提供できない。

育児上のトラブルや子育てが思うようにいかないなど、子どもの発達の途上でぶつかる子育ての心配への対応も相談室です。子どもを公園に連れ出し、子育ての仲間や地域の人の中に自らの力が入っていきける親子には大きな援助は必要である。しかし、子どもを抱えながら孤立している人、育児が重荷になり過ぎている人などは、少し援助を受けることで、社会とつながったり、育児を楽しむ気持ちになれたりする。また、時には夫との関係が変わるなど家族の人間関係が変容することで事態が改善していくこともある。少しの支えで、内蔵していた力を発揮でき、その後は援助が必要なくなっていく。

### 相談内容の変化

設立から二十余年の歴史をたどってみると、親から持ち込まれる相談の内容も大きく様変わりしている。ここ何年間かは、毎年乳幼児人口の三パーセント弱が

相談室を利用している。

設立当初は、障害を持つ子どもをどのように育児をしたら良いかわからない、どこか療育できる所はないだろうかなどのように、障害に関連する相談が持ち込まれることが多かった。何人目の子育てであっても、子どもに障害があつたり、生まれつき対人関係の歪みを持つ子どもであれば、だれもが戸惑い心配し、不安になるのは当然と考えられる相談であつた。言葉の遅れや障害を受け入れられない苦悩と、親として何をしたいけるかなど、子どもの心配な状態が軽減することにはあつても完全になくなることは難しく、一人ひとりの悩みは深いものであつた。



親たちの訴えに変化が出てきたのは、特にこの十年  
余りである。一つは勝手なことをするなど対人関係の  
稀薄さの心配が多くなってきたことである。もう一つ  
は、親の育児に対する態度の変化である。この二点は  
微妙に絡み合つて子どもの発達に影響を与えている。  
ひどい虐待には至らなくても、いらいらなどを子ども  
にぶつける、あるいは子どもを無視するなどによつ  
て、対人関係に歪みを来たしている子どもが増えてい  
るのである。

市で一九八三年度から一歳六カ月健診が施行される  
ようになり、より低年齢で相談のスタッフがかかわれ  
るようになったので、その心理的治療効果はかなり上  
がるようになった。子どもの年齢が低い程、また親と  
の歴史が浅いほど両者のかかわりの変化につながり、  
その後の育児、子どもの健康な発達に良い影響を与え  
やすいからである。

## 親子支援の実際

—ことばの遅れのあるKちゃんの事例から—

市の一歳六カ月健診でことばが少ないとの心配で心  
理相談を受けたKちゃん。落ち着きがなく、人の呼び  
かけに応ぜず自分勝手さが目立っていた。注意しても  
Kちゃんは言う事を聞かず繰り返したずらをする  
母親は困りきっていた。

母親は外国人で知人がほとんどなく、孤立した育児  
が行われていた。また、子どもとの情緒的なやりとり  
を楽しむ経験が少なく、育児には力を注いでいたが、  
母親の一生懸命さは空回りしていた。

この母親に育児が伝達できる場として、市主催の遊  
びグループと保育園との連携を考えた。遊びグループ  
では主に乳児の遊びを通して母子がかかわる経験を積  
むこと。保育園では乳児クラスへの母子通園をさせて  
もらい、乳児の食事内容や食べ方、大人（保育者）の  
子どもへのかかわり方などを母親に伝える機会とする



こと。そして、市の心理相談員は、母親を支えながら必要なサポートを提供する役を取った。

母親の就労の必要が生じ、無認可保育園へ入園したが、うまく行かず、幼児相談室に問い始めた。そして、新しく入園した無認可保育園には相談室から訪問もし、Kちゃんの気持ちにに応じていくことやKちゃんの発達をどのように考えていくかなどを話し合った。

Kちゃんなりにことは少しずつ増え、保育園生活を樂しめるようになった。友達とうまくかわるには、続けて大人の配慮が必要だが、何とか集団に適応可能なまでになっていった。

Kちゃんの場合は、キーの役を最初は市役所の保健婦、心理相談員がとり、幼児相談室に通うようになってからは幼児相談室の相談員が取ったという連携を示す事例である。

### 幼児相談室の効果

相談室での幼児期への対応は本人に対してのその時

の治療的かわりにとどまらず、その後の子どもの発達の予防的な意味をも持っている。たとえば、登園拒否を思春期まで持ち越したら、問題はこれ大きくなり、本人もその家族も大変な思いをするであろう。その人が社会に適応できる自己を育てていくためのサポートには多額の経費を要するであろうし、場合によっては適応困難のままで過ごす可能性もある。

また、子どものことを通して親が深刻な悩みに直面したこと、いつの間にか親がエンパワーされ、自分の生き方にまで影響を及ぼしている。相談室を卒業した親たちが、自分の空いた時間を使い、地域の担い手として活動している話も時々聞こえて来る。わが子が脳性麻痺であるために車椅子の操作になれていることを生かし、障害を持つ方の付き添いのヘルパーをしたり、自ら体験した人の“心”の大切さを介護の仕事へつなげた方もいる。また、ある母親は学生時代の学びを生かし、子どもの小学校で絵本の読み聞かせを始めた。その輪は、一つの学級から学校中に広まり、現在

では、地域の他の小学校にまで広がっているという。

わが子のことで悩んだ経験は決して無駄ではなく、痛みを経験しているだけに、心をこめて相手と接しているのだらう。授業に集中しない子も読み聞かせの時間を楽しみにしているという。

以上のように、地域の関連機関が相互に上手く連携をとり、親子のその時々が必要に応じた援助を提供しているのだと言える。そのような意味で大人同士が相手の役割を認めつつこまやかな連携の輪をいかにつくれるかがキーとなるが、その際、幼児相談室の意義は大きいのではないかと思われる。

(以上永田)

## おわりに

### ―地域の連携における自治体の役割―

健診活動と切り離して幼児相談室をもち、かつ發展的に機能している自治体は数少ないのではないかと思



われる。しかも、エンゼルプランの動きよりもずっと前の一九七七年に設立されたということにも考えさせられることが多い。地域の要求を一人の専門家が汲み取り、その構想を自治体が受け入れて設立し、運営を社会福祉協議会に委託した事業だという。

七七年から二十年以上の経過と成果に学び、もっと他の自治体においても位置付けていってよいシステムではないかと思われる。

幼児の相談機関は、福祉行政の管轄にあるが内容は学齢児以降の教育相談所のような機能をしている。幼児だけが対象であると、学齢期から思春期までタテのつながりがつくりにくいのではないかという意見も耳

にする。けれども、永田氏も書いているように、幼児だけの相談機関であるからこそ、気軽に外向けるという面がある。東村山市では、学齢期以降を対象とした教育行政の管轄になる教育相談機関とも連携がとりやすくなっているというが、幼児専門の機関が生涯発達の土台としても機能するにはその背景として機関同士の連携についても同時に考えていくことが大切になる。そしてその際、幼児期についての連携の核となる機関として自治体の事業としての幼児相談室が大きな意味を持つ。

多くの自治体では保健機関のみで相談にあたっているが、幼児相談室は、それだけでなく保育園や幼稚園への巡回も含めて、保健センター等と連携しつつも、生活と遊び、そして心理面を含めた幼児の総合相談の場があることは心強い。幼児相談室が外向きやすいのは、障害の有無にかかわらず日常の些細なことでも心配がなくなるまで何度でも相談できる点にある。すなわち、独りぼっちの親子をなくす出会いの場として

の「子育て広場」と、障害の早期発見・早期療育にかかわる保健機関との中間的存在としての意義を持つからではないかと考えられる。

こうした相談しやすかつ幼児支援の連携における核となる取り組みを自治体の事業として行い、利用者に無料で提供していることは、経済事情の如何にかかわらず相談の機会がすべての住民に平等に開かれているということであり、自治体ならではの意味を持つものと思われる。

子育ては住民自身の課題であるが、それだけに自治体の施策のありかたに住民自身が関与し、子育てが楽しくなるような施策をどう実現していくかが重要になる。

金田（静岡大学）  
永田（東村山市幼児相談室）

子ども時代と私 (21)

子ども時代と私



蕪木 壽江

小学校三年の夏

「てがみは、つきましたよ、とてもうまいといって皆がほめました。僕は九日に行けないでしょうから、ようがあつたら、てがみを下さい。すぐ行きます。それから、おふろにあるおゆの出る所はきをつけなさい。とてもあついですよ。お母さんが、てがみをたくさん下さい、つておっしゃいましたよ。おかあさんは、も

うだんだんよくなりましたから、安心して下さい。さようなら 吉田薫壽」千葉県の大貫海岸に臨海学校に行つた時の、五歳年上の兄からの葉書です。

川崎・9・8・7・8のスタンプが、今も消えずにあつて、仏様の下に大切に仕舞つてあります。

母から離れて、しばらくぶりで帰つて来た横浜の港の燈の輝きに、懐かしくて何故か胸がいっぱいになりました。その一週間後の夜に学芸会があり、松・竹・

梅組から一人ずつ選ばれて、校庭の舞台で踊りました。私は、うす緑の紹縮緬に薄いピンクの花柄のある着物に、兵児帯へこおびは、三つのお祝いの時のピンクの扱しきでした。学校の入口までハイヤーで来て、それから兄が母を負ぶって来てくれました。「良かったー良かったー」と、何遍も言っていたそうです。今では工業都市の川崎もその頃は田舎で、小学校の裏に小川が流れていて蜚が五、六匹とんでいて、暫らく母もそれを感じて眺めていたと、兄から聞かされました。

母が逝ったのは二十二日でした。その前日、「お母さんが死んでも泣かないのよ。このお人形さんをお母さんだと思って遊んでね」と、仏様の下から、箱に入ったフランス人形を出して抱かせてくれました。お葬式は、近所の方々や親類の方、お友達が大勢で賑やかでした。一年生の時から受持ちの、大好きな後藤先生のお顔を見た時は嬉しくて、急に涙がとまりませんでした。

押入れの中に、母の作って下さった新しい三人の四

幅布団のぶどんがありました。名前が書いてありました。私は真綿が入っていました。母の日本髪の手緒てがらを合わせて縫った少し小さいお布団もありました。どれもお母さんの匂いがしていました。大きくなって困らないようにと用意して下さったのでしょうか。

父は、私が六歳のクリスマスに亡くなり、母は祖母の隠居所にしていた川崎に、お庭続きで家を建てて引越しました。

亡夫はセルロイドの玩具輸出商で、アメリカ始め、ヨーロッパ各地、チェコスロバキア等と、取引をしていました。日本橋小伝馬町にビルがあり、外人のディーラーがくるので、靴で上れるように、赤い絨毯が家の中に敷いてありました。日本では見られないセルロイドに同じ色の和紙を張った動物（象、ライオン、虎等）にしてもサイズが小さいだけで本物そっくりのミニチュアがありました。大きなキューピーさんもあり、工場は横浜にありました。

中学二年の兄は、お母さんのような存在で、中学一

年の兄はお父さんのようでした。学校から帰って来ると、いつも兄達は、私を自転車の後ろに乗せて、ピンポンや野球をする時は学校へ連れて行ってくれました。ガードのある土手では、体を横にして下までグルグルとまわり藁だらけになったり、近くのたんぼでは、おたまじやくしを取ったり、蛙を掴まえたりと日暮れまで遊びました。

## 五寸釘

家の中の整理をするから、といって私達三人は、祖母の家に行きました。祖父は背中にお経の書いてある白い着物に着替えて、四時頃からお経をあげるのです。その前に、お水やお茶をお供えし、祥月命日の仏様にはお膳をあげるので、女中さんのお手伝いをしていました。

位牌は二十数体あったでしょうか。「南無妙法蓮華經」と唱えていると、母に会えると言われ、祖父の後ろに座って、真剣に声を出して手を合わせました。

「お母さんに会えますように——」「会いたい、どうしても会いたい」の一心でした。祖父は、よくお母さんに会えます、「壽江のことが一番心配だと言っていました。女中さんの言うことを聞いて、『お母さんはそうじゃない、お母さんはこうする』と、いちいち言わないように……と、言っていた」と……。私のお経はだんだんと大きな声になり、テニヲハは違つても、意味が通じなくても祖父について合わせていました。けれど、一度もお母さんには会えませんでした。

祖父は、深川の材木問屋の近忠商店だったので、総檜造りの広い家でした。その屏に五寸釘で、

「かわいそうなとしえ」

「かわいそうなとしえ」

と、力を入れて並べて書いては、「お母さんのところに行きたい」と、涙をこぼしていました。上の兄はそれがつらく、「壽江が、又、『お母さん』って泣いている、お母さんを恋しいのは俺だって——」と、書かれてあるお兄さんの日記を見て、「ごめんない、もう

泣きません」と眼を拭いていました。兄が仏様の所で顔を伏せているのをその後見ませんでした。

### 動物ビスケット

病気で寝ていた祖母が亡くなり、毎日のように、母の親類や従姉達が、祖母の所に来てくれました。珍しいものがあると届けて下さったり、これは「お兄さん達にもあげてね、一緒に食べるのよ」と、声をかけたりにして、笑わせて帰って行きました。おばちゃん達はお人形さんのお布団や、着物を作ってきたり、お菓子箱を包んであるのし紙や、綺麗な包み紙を集めて持ってきてくれました。

見ただけで中味が伝わってくるおいしそうな紙を、



切ったり、貼ったりして、友達と着せ替え人形を作ったり、反物屋ごっこに使って並べたり、折紙のようにして、大きな風船を作ってつきっこをして、来る日も、来る日も友達と一生懸命に、遊びました。その時だけ母の事は忘れることが出来た様な気がしました。又、お庭でかくれんぼや、鬼ごっこをしたり、床が高いので、その中に入ると、なかなか見つからなくなつて出てきたり、ごさを敷いてママ人形と、おままごとなど、飽きることがありませんでした。

小さい兄は手先が器用で、中学の服を裏返ししたり、私の宿題の割烹着を本所まで行つて従兄の家で縫ってきてくれました。得意なのは散髪で、私のおかつぱの髪を上手に揃え、床屋代を祖父からもらつて、それ全部で「動物ビスケット」を買い、皆でお腹いっぱい食べました。ちよつとしよっぱくて、ほんのり甘くて、兄弟の思い出の味になりました。私の髪の毛ギザギザなどなんのその、威厳のある祖父にかくれて悪さをする楽しさがあとを引いて、度々、夕飯を残し

ました。

勉強部屋の窓と、祖父の茶の間の窓とは二米メートルぐらいしか離れていないので、祖父が、お風呂のタオルがビショビショだとか、廊下が汚れているとかいって怒ると、三人でその窓を開けて、「ハゲタイテナメテミナ、シンタクワンノアジガスル」と大声で声を合わせました。

上の兄は棒高飛びが上手で、すぐ隣の原っぱを整地して砂を敷いて、家から母が治療に使ったバイタライトランプ 500 W を照らして練習していました。大会に出て二位になったことがあります。関口君がいつも一位なので、兄の友達の名を覚えたりしました。

## ハーモニー

三人寄るとすぐ歌がです。お兄さんは、バリトン、小さい兄はテナー、私はアルトで、どんな歌でもすぐハーモニーで歌える兄達でした。ある日近所の人々が「吉田さんの兄弟は親がいないのにどうして明るい

の？」と、顔を覗いて言いました。兄は「音楽があるから——」と、すぐ答えていました。なんていい言葉だろう、と言い直してみました。

お正月には、兄達について、いつも百人一首をする近くのお姉さんが三人いる家まで行きました。畳で取ると、衛生的でないと行って、畳屋さんの台のようなものが出来ていて、和紙が何枚も貼ってありました。

私は、みかんと南京豆を頂いて炬燵の中に入っていました。が、読み手がいない時は読んでいました。母がいた頃、晴着を着て百人一首を取って、兄とぶつかり鼻血が出てとまらず、母が『大江山幾野の道の遠ければ——』は、壽江が覚えたばかりだから、お兄さん達は取らずにいるのよ』と、言っていました。





## セーラー服になつて

女学校の入学試験なのに熱が高く、肺炎だと診断され、注射を太股に打って、兄に負ぶさつて試験場に行きました。教室でも何回もタオルに吐いて苦しみながら終わりました。体操の試験では、歩けないので兄に抱まっていると、先生が「313番、無理しないで座っていなさい」と、椅子をすすめて下さいました。下の兄は隣のお姉さんが作つて下さった海苔巻を持って来てくれました。折角のお弁当は食べられませんでした。が、又、兄に負ぶさつて帰つてきました。試験は合格していました。

卒業式の日には祖父がついてきて、「一年の時から五年間、総代で免状を貰っていますから、練習しないで大丈夫です」と、受持ちの先生に言いに行つてくれましたが、級長だったのに代わりの人が出ました。

女学校では、バレーボールの選手として神宮外苑で活躍した思い出があります。

上の兄が兵隊に行き（外地）、ぼつかり穴があいたように寂しくなりました。兄はよく葉書を書いてくれました。その度に、その便りを握つて、無事を祈りながら祖父の家の仏間で寝ていました。下の兄も兵隊に行き、休暇で帰つて来ると、祖父が告げるのか「壽江は小学校の先生になるのに、おじいさんの言うことが聞けないでどうするのです。よく反省なさい」と書いて、軍隊に帰つていきました。

幼稚園の先生になつて教育実習生の卒論を見て頂く為に、何回かT先生をお訪ねしました。「燕木先生って不思議な方です。記憶にない以前に、どんなにかご両親に愛されて、大切に育ったかがわかります」と言われました。

胸を押さえて家に帰り、写真の両親に感謝しました。ありがとう「お父さん、お母さん」。

（元・市ヶ尾幼稚園）

# 宇宙を感じる

村井 利行



夏の夜、花火に興じた帰り道、ふと見上げると星空が……。都会ではせいぜい五、六個の星しか見えないかもしれませんが、それでも「あれは何座の星?」「白鳥座じゃないの」といった会話が飛び出すことも多いと思います。星空のきれいな所では、きつと、しばし星の観察が続くことでしょう。寒いと目が上を向かないですが、夏は自然と目が星空に向かうようです。これからの季節、少し時間を割いて星空を眺め、宇宙を感じてはいかがでしょうか。

私は高校で物理を教えています。科学系クラブの顧問をしており、時々学校に泊まり

込んだり夏休みには志賀高原などで合宿をして生徒と一緒に天体観測をしています。天体観測の中でも人気のあるのは流星観測です。きちんとした「観測」となると流星も結構奥が深い相手なのですが、単に眺めるだけでも流星は楽しいものです。しかし、流星に限らず天文現象は、理屈が分かっているとともにさらに楽しいです。「理屈を言う」とロマンがなくなります。「宇宙を感じる」といったロマンでしょうか。流星についての簡単な解説をしながら、そのようなことをお話しさせていただきます。

読者の皆さんは、流星をご覧になったことがありますか？ 流星、流れ星という言葉自体は月や太陽と同じくらいポピュラーですが、実際に流星を見たことのある方は意外と少ないようです。流星と言えば「願い事」を連想されるかと思いますが、これも流星がとても親しまれている証拠でしょう。もっとも、実際に見たことのある方は「とても願い事どころじゃない」と言うでしょう。流星が現れている時間は、普通は一秒にも満たない短い時間で、短めの願い事を準備しておいた人でも、いざ出現となると「アッ」とか「オー」とか言うのが精一杯なのです。本気で「願い事がかなう」と思っている人はいないでしょうが、それでもこの私も含め誰でも、星空に流星を待つとき、やはり「願い事が言えたらなあ……」などと考えてワクワクするものではないでしょうか。いつ誰が流星に「願い事」を結びつけたのか知りませんが、なかなか気の利いた発想だと思えます。

流星は確かに魅力的ですが、宇宙の現象と言えるでしょうか。

流星は、宇宙の塵が地球の大気に毎秒十数キロメートルというような速さで突入して高温のため気化、発光する現象で、その意味では地球外の宇宙での現象ではないです。しかし、降り注ぐ宇宙

の塵は、火星や木星のあたりから、あるいは太陽系の果てからは

るばる旅してきて、たまたま地球の重力につかまり大気に衝突したのです。そう考えると流星もダイナミックな宇宙の現象と言えます。流星を見るときも、そのダイナミックさを感じたいものです。車に乗っていて、雨が降ってくると、窓ガラスを雨滴が走っていきませんが、流星はこれと似ています。私達は地球という「車」に乗って宇宙空間を動いているのですが、時々宇宙を漂う塵が大気という「窓」に飛び込んできて輝くわけです。そこなのですが、時々宇宙を漂う塵が大気という「窓」に飛び込んできて輝くわけです。そこで、あたかも車に乗っているかのように、「自分は地球に乗って突っ走っている」と意識しながら流星の出現を待っていると、まさに宇宙を感じるといった気分になります。実際、地球は太陽の周りを毎秒三十キロメートルという猛スピードで突っ走っているのです。

一九九八年秋、しし座流星群が大変話題になりました。流星出現が最大になると予想された日、私はクラブの生徒達と一緒に、奥秩父にある小高い山の上のキャンプ場で観測をしました。あの日は、ラジオを点けるとしし座流星群の話題で持ち切りでした。読者の皆



さんの中にも夜遅く流星観測に出掛けられた方が多かったのではないでしょう。流れ星が雨のように降る「流星雨」も期待されました。実際、三十数年前には雨のように（豪雨ではないです！ポツポツ雨です）星が流れたのを私も見ています。

今回は残念ながら、日本では「雨のように」は流れませんでした。普段よりはるかには多くの流星が現れました。明るい流星も多く、特に午前四時過ぎに現れた大流星は圧巻でした。私が奥秩父で観測をしていたとき、自宅でも子ども達が四時頃に起きて五階のベランダから南の空を眺めていて、あの大流星を目撃していました。当時小二だった息子は今でも「あれはすごかったよー」と言っています。しし座流星群のために高校生の全国的な観測ネットワークが組織され、私たちのクラブもそれに参加させてもらいました。観測の翌日、部員達は学校を休んだのですが、観測ネットワーク参加ということもあって、正式に出席扱いしてもらいました。なにしろ徹夜で観測をしていたのですから、翌日の授業はちょっときついです。もともと、部員の中に野球好きの三年生がいて「きょうの体育の授業はソフトボールだから」と言って、少し仮眠をとってから一人学校へ向かいました。

ところで、しし座流星群にはなぜ「しし座」という名前が付いているのでしょうか。実は、星座の名前の付いた流星群はしし座流星群以外にもたくさんあって、それぞれ毎年決まった時期に流星を出現させています。これは、太陽系の一員である彗星に関係がありま

す。彗星も太陽の周りを地球と同じように回っている天体ですが、その軌道は地球のように円ではなく、ずっと細長いものが多く、はるか遠くからやって来て太陽に近づき、再び遠くに去っていくのです。そのため、彗星の中にはその軌道が地球の軌道とニアミスを起こしているものがあります。これが流星群の原因となります。彗星は自分の軌道上を動いていますが、その軌道の全域にわたって細かい塵もゾロゾロと動いているのです。

さて、そうなると、その「塵の行列」の中に地球が突入すれば流星がたくさん出現するわけです。ドライブをしていて、雨を降らせている雲の下に入ったときと同じです。突然ザーツと雨が降りかかってきます。ところでそのとき、車の中から見て雨粒はどの向きから車に向かってくるのでしょうか？　そう、だいたい車の進行方向からです。実は、それが流星群に星座の名前が付く理由になるのです。つまり、しし座流星群が出現している時、地球はちょうどしし座の向きに動きながら「塵の行列」と衝突しているわけで、流星はしし座を中心として広く放射状に流れます。まさにその向きに地球が突っ走っているのです。そうイメージしながら観測をしていると……宇宙を感じます！

一九九九年のしし座流星群もかなりの数の流星が期待されていました。しかし、世間は冷たいもので、ほとんどニュースにもならなかったようです。結果的には、出現のピーク



と予想された日、日本全国だいたい曇りで、多くの熱心な天文ファンをガツカリさせました。しかし、皮肉なことに本当のピークはその翌日に現れ、天気も良かったのです。私達のクラブは……、実は、ピーク予想日に観測をすべきだったのですが、ちよつとした都合で「翌日」に学校の屋上で観測をしました。「ピークの一日後でもちよつとは流れるでしょう」といった気持ちだったのですが、東京のど真ん中で一時間に二十個くらいの流星を数えました。幸運でした。

さて、八月十二日前後には、ペルセウス座流星群があります。これは、毎年確実に多くの流星を出現させています。夜半少し前から明け方にかけて、三十分位でも星空を眺めていれば必ずいくつか流れるでしょう。ペルセウス座の位置など知らなくても大丈夫です。どの向きを眺めていても流星の出現確率は大して違いません。流星をまだ見たことがないという方、必見です！ 今年はその時期がちょうど満月に当たって、空が明るくなってしまうのが残念ですが。

流星のことばかりお話してきましたが、もっと手軽に宇宙を感じる方法があります。七月八日が上弦の月、七月二十四日が下弦の月、それに七月十六日（日）には皆既月食（午後十時皆既入り）もあります。それぞれ、宇宙を感じるチャンスです。月食は、言うまでもなく地球の影に月が入る現象です。細長い地球の影が夜空にスーッと延びて見えるなら、それに越したことはないですが、そうもいかないので、これも想像力で補いましよ

う。今回の月食は観察の時間的な条件が良いと思います。詳しくは当日の新聞をご覧ください。次に上弦・下弦の月ですが、上弦の月は夕方、下弦の月は朝方に見えます。どちらも、角度で九十度も離れている太陽と月を同時に見る事ができるところがミソです。どこか広く空が見える所に行つて、太陽と月をいつぺんに眺めましょう。そのとき、星の王子様のように、「自分は地球という『小さな天体』に乗っている」と意識するとよいです。遠くに太陽があり、地球はその周りを回っている。そして、月は比較的近くにあつて地球の周りを回っている……そんな十分に分かっていることを、大空を眺めて実感するのもいいものです。

月まで行つたアポロ宇宙船のクルー達は、真つ暗な宇宙の中にボツンと浮かぶ孤独な地球の姿を見て、「宇宙というものを実感した」と言っています。「宇宙がある」ということは誰でも分かっていますが、そのこととそれを実感するということは異質のもののようにです。できれば月面に立つて地球を眺めてみたいですが、それがかなわないなら、地球上でせめて想像力で宇宙を感じたい。私はそう思っています。

(お茶の水女子大学附属高等学校)



# 気になる

高橋 陽子

四歳児三十三名を受け持ち一年が過ぎた。あつという間の一年でその時々では、悩んでいたこと、気になっていたことが、今、終了式を終え子どもたちから離れて別の忙しい日々を送っていると、なんだか遠いことのように思えてしまう。三年保育と二年保育の混合ということも悩んだこともあれば、個人に対して“どうしてそうなの？”と気になって、気になりだす

と、何日も何週間も、個人ばかり追いかけることもあった。子どもにとつては、いい迷惑(?)だったかもしれない程に。個人だけではなく、その子どもが属するグループのそれ自体も、一人一人も、全部気になる。気になれば私の場合“気になっているのよ”といった顔になってしまうようで、「何しにきたの？」から「又、来たの?」、「もう来ないでよ」、とますます気

になる態度にさせてしまっていたようだ。いつ気にならなくなるのかな、と考えてみたら、悲しいかな、次に気になる存在が、私の中に大きくなって、今まで気になっていた個人、そのグループより心を占めた時かもしれない。

先日他の幼稚園を参観する機会を得た。時間として二、三十分ではあるが年少組の部屋の片隅に座って子どもたちを見せて頂いた。学年末の三歳児の姿の何とかかわいいことか。四歳児の四月だつてこういう感じを残していたらうに、スタート時の慌ただしさに見えていなかったなあとと思うともったいないことをした、と思う。例えば、男児四、五人がブロックで作った武器を持つてオーレンジャーごっこをしていた。部屋からダーツと廊下に走り出していく。参観の私に向かって武器をかまえる。又、ダーツに戻る。「もつと大きくしようぜ」、と言いながら、皆で組み替える。又、ダーツと出かけていく。各々が標的に向かつて格好よくかまえ、一人が戻り始めると、皆、戻る。「Aくん、

同じの作つてよ」「いいよ」、で頼んだ方は隣で見ている。作り終えて、又ダーツと出て行く。私が担任で、その場に居合わせたならば、「武器は人に向けないでね」と言っていたかもしれないし、又、武器を持つて走りまわっている“と思つたかもしれない。でも、外から見ていると、子ども同士お互いわかつているし、自分たちの中で“ここまで“といったわきまもあるように思えた（本人たちは意識していない、と思うが）。

他の場面では、二、三人の女児のグループがおすしやさんごっこをしていた。そこにBくんが「入れて」とやつて来る。「ダメー」と言われたBくん、色々なやりとりの後「カセットを貸してあげるから入れて」と大切にずつと持ち歩いたカセットを渡す。先生の「押しもあつて「いいよ」となる。他の男児がくる。「入れて」「ダメ。上ぐつはいるからダメ」。「上ぐつ脱いだよ」「でも、武器を持つてるから、ダメ」。彼は決心したように、足元にそつと置く。「もう、

持ってないよ」「壊してないから、ダメ」。そつとブロックを外していき、最後はブロックの山を無造作におしやる。「壊したもん」「ダメー」に、ブロックをブロック入れにしまいに行く彼。でも、最後まで入れてはもらえなかった。その日だけその場面だけを見て何もコメントは出来ないけれど、一回目の「ダメ」だけ聞いてもしくはブロックをバラバラにしているところだけを見て、担任が何か言っていたら、違う流れなり雰囲気になっていたかもしれない。私が保育をしていて、その場面だけを見て、気になって声をかけてどんどん深みにはまってしまったことが何度もあったことを思い出した。

Cくん、早生まれ。三年保育。入園当初より気になったことは、ことば遣い。「おめえ」「ばかやろう」「何言ってるんだ」と、ありつただけの悪態をついて自分の世界にちよつとでも入ってくる人を牽制する。時には物を投げる、壊す、人にかみつくなど、ガードが固く、入りこむ隙間の微塵もないような感じだった。

彼の気にすることの一つは、月齢。十二月のお誕生日会の日に「おれは今三歳十ヶ月だからあと二ヶ月したら四歳になるけれど、Dは三歳九ヶ月だから、おれが四歳になって一ヶ月したら四歳になる」、と言ったときには、彼の生きづらさを感じるとともに、「気にさせてしまっているのかもしれない」と気になる私があった。入園当初から気になる子どもで、二学期間一緒に過ごしてもまだ、気になる要素がみつちり詰まっていたので、今思えば悪い方への相乗効果とでもいおうか、気持ちを経くする手助けをしているようで逆のことをしていたのかも、と思うことがある。

ある三学期の帰りの片づけをしている時のこと。Cはそれまで粘土をしていた。「片づけましょう」の声に即反応した男児（Eとする）が「もうお片づけだよ」と言ったところCは間髪入れず殴る、ということがあった。Eは怒ってCの粘土をぐしゃ、とつぶす。Cも怒ってEを殴り、Eは泣く。そこで担任は気づいたのであるがEが泣き隣にこわい顔をして掴みかかる

うとしているCがいれば、とっさに「Cくん」と止めに入る。お帰り間際という私にとって一番気持ちが高揚している時でもあり、何とかおさめなくては、という思いばかり出て、対応していた。そしてCの怒りの理由はきちんとはわからないままに時間ばかり経っていく。焦り。ついにさようならの後にまで親に理由を言つて、Cにどうしたのか、でもやつてはいけないこと、を繰り返して言っていた。ついにCから本当の理由は聞かされることなく、うやむやに終わらせてしまったような気がする。気になる子どもを、何とかしたい担任の思いの重さが、何も見えなくさせていたのか。参観させて頂いた年少児たちの姿から、色々な場面でのCとのやりとりを思い出していた。

Cも年中にあがり、人とのやりとりも出てきた五月後半のある日。年中から入ってきた四月生まれの体の大きなF（幼稚園の経験なし）と人気がない隣の隣の保育室に入っていく。半ば追いかけるような形でその部屋に入り、隣に座る。Cが空の箱に手を入れて「何

を出して欲しいか言ってみろ」と独特の口調でいう。

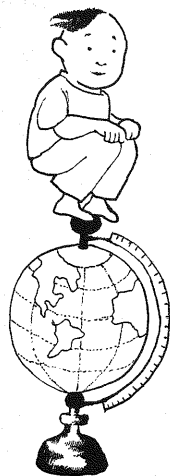
（四月に誕生会に参加した時自分の誕生月でどのような誕生日の歌がわからないからもう誕生会は出たくない、といったF。少しずつやりとりの楽しさを感じてきていたところだった）Fは何を言われていて、何を言っているか全くわからない、という感じだったので、私が「じゃあ、ケーキをお願いします」と言う。Cは「ハイ」と空箱から取り出して渡すしぐさをする。私も「おいしいですね」や「おかわり下さい」と言う。そのやりとりをじっと見ているF。しばらくして三年保育からの友だちが来て、Cの問いかけにごく普通に答えていく。たまに私が「Fくんの分も下さい」と言えば、さっと渡してくれるC。戸惑いながらも受けとるF。そのやりとりが楽しくなって、興奮状態になっての終わり方だったがその後何日間か、CとFは一緒にいた。Cは独特な命令口調や、態度が出るので、Fは自分の居易い場所を探して、離れていったようだった。

そういうCにも殆ど一緒にいる仲間（G）がいる。

Cを丸ごと受け入れて一緒にいるのか。ある時、そこが気になり出した。会話を聞いてみるとやはりCは自分の世界を語り、そこにGを巻きこんでいる。Gは返事はせずについていく。何度も「行かなくていいんじゃない？」や「本当はどうしたいの？」や「Gくん、○○しようよ」と問いかけた。Gはどのことばにも返事はしないで、じつと担任の顔を覗きこむようにしている。その目は「そうなんだ。本当は違うことをしたいんだ。でも、できないんだ」とも「いいんだよ。先生こそ。何言ってるんだ？」とも受けとれた。何を語りたいのかわからない目。それを理解できない私。何だかしっくりいかない日々が続く。

Gのはじめのイメージは物わかりのいい黙々タイプ。年少時三学期「ぼくのパパは○○に乗ってる」と言って、積み木やお店やごっこでよく使う台を組み合わせて○○を作って乗ったり、いつの間にかそれがパトカーになって交番ごっこをしたりしていた。年中組

になって、朝来てしばらくの間、エプロンに安全ピンでとめてあるハンカチを口にくわえてボーとしていることがあった。Cから声をかけられればそちらに出かけるがなかなか自分から行動にうつすことはしなかった。一緒にいたはずなのにCのまわりで事が起こっても「ぼくじゃないよ、知らないよ」とでも言いたいように、座りこんでいることもあった。Cのイメージから抜ければ、Gのやりたいことがわかり易くなるかもしれない、という思いや、やりたいことをやっていいんだよ、いやならいやって言っていいんだよ、と伝えたい気持ちが相まってつい分Gに問いかけてきたと思う。CとGと離れる時間があつて、Gだけ砂場に熱中



していたり、大型積木の上にでんと座っていることもあるが基本的にはCとGは一緒にいる。どうもGの育ちからして、人に言われて行動する方が過ごし易かったようだ。そんなGも、年中二学期終わり頃から、片づけの時間になるとすつといなくなったり、いつまでもおしゃべりがとまらなかつたりで、物わかりのいいイメージは消えかけている。

年中二学期の十月に、新しいブロックを出した。はしごのようなパーツを六、七コつなげて折りたたみ、それを持った人たちが仲間を作るようになった。C、G他数名で作るので、六、七コ確保できない時もある。Cは「先生、おれは二コしかもっていないのに○〇はたくさん持っているから、○〇に言ってくれよ」と言ってくる。自分で交渉するのが苦手で必ず先生を頼ってくる。行き違いの多い彼と私の間だからこそ、こうやって頼られた時は真剣にやりとりをする。その間、彼は私のひざに座りベターと体を寄せてくる。交渉が成立し、折りたたみ式のそれを手にすると（それ

はブーメランだそうだ）顔つきがかわる。さつきまでベターと体を寄せていた時の心配そうな表情から「悪いやつはどこにいる、いたらこのブーメランでやっつけろぞ」といった険しい表情になる。時には玄関扉に向かつてブーメランを投げたり、遊戯室の舞台で投げっこしている（人に向けてはいけないことは、わかっていうようだ）。硬いブロックである。扉や床にへこみ傷ができることもある。ブロックだって角がへこんだり外れて人に当たることもある。それを険しい顔つきのCに止めさせようにも耳がないかのようにやり続ける。そこで回りの子どもたちに声をかける。Gを含め他の人たちはその場はやめる。が場所をかえて同じことの繰り返し。ついつい「また、あなたたち！」と声を大きくすることになる。

気になる子どもに声をかける時、どうもしっくりいかないことが多い。Cの本当に切ないまでの口調（年長児に追いかけられた時「先生、追っかけないでって怒ってよ」という。なかなか行けないでいると、私の

状況にはおかまいなしに「陽子先生、早く、こっちに  
来てよ。こんなに呼んでるのに何で来てくれないんだ  
よ」と叫ぶ。）で私を頼ってくる時の様子と、全くこ  
ちらの言うことに耳を貸さないでいる時の様子。その  
他色々な姿をみせるC、生きづらさを感じさせるCに  
声をかける時、私は一瞬何かためらいを感じる。そこ  
からしつくりいかなない気持ちを残すのだろうか。

最近「Cくん。変わってきましたよね」と何人かの  
先生に言われる。「立ち止まって、こつちを向いて聞  
くようになったね」とも、「最近めつきり部屋（Cの元  
のクラス）に来なくなってたと思つたら、今日突然現  
れて、なぜなぞ出していった」とも、「〇〇する  
のはどう？」と他の子に聞いていた」とも。そしてあ  
る日、粘土で食べ物を作りそれを売りに行く、と言  
う。年少組に向かった彼らの後をついていきどうする  
かなと覗きみてみると「これ、欲しいやついるか」の  
ように言っている。その場は、年少の担任の先生がう  
まくとりもち、もらってくれる子がいた。二回目、行こ

うとしている時「食べる人、いませんかってやさしく  
聞いてみると、たくさん買ってくれるんじゃないか  
な」と声をかけておく。又々後ろからついていきドア  
の陰から見てみると、Cは口ごもりながらもそんな風  
に言っていた。CはCであるから、全てが変わること  
はないと思うし、気になる担任は変化すらも気になる  
のかもしれないが、その時その場で出会ったCをきち  
んと見て対応して変化を感じてくれる色々な大人（先  
生も用務員さんも）に囲まれて着実に成長していくこ  
とと思う。

Cのことばかりになってしまったが、気になる人は  
たくさんいる。（ゲームの話を殆んど一日中している  
人、疲れたように、イスに座りこんでいる人、ケンカ  
してにらみ合つては笑つてごまかして、解決してしま  
う人、二人そろって一人のような人たち。）気になる  
人たちに気になっている担任がどう関わるか、悩み多  
き日々である。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

# 編集後記

先日、新聞で、ある母親の投稿記事を読みました。題は「喜ばれ、ミシン楽しく」というものでした。

その母親は、わが子の入園に際し「とうとう来るべきことが来た」とプレッシャーを感じていたそうです。それは、彼女が学校時代から家庭科が苦手でミシンでまっすぐ縫うことすらままならないのに、入園までにバッグなどを手作りしなくてはならないことからきていました。

初めに、直線縫いだけのナプキンが悪戦苦闘しながら縫い始めると、子どもは面白そうにのぞき込み、片時も離れません。やっとできあがったナプキンを手渡すと、「ワー」と

目をキラキラさせながら受け取って、二、三日ずつとそのナプキンで遊んでいました。

彼女はその姿を見てうれしくなり次々にバッグを三つも作ってしまいました。そして、今までミシンを踏んでこんなに喜ばれたことがなかったことに気づきました。家庭科では縫ってもすぐ縫い目をチエツクされ、ビクビクしていました。

そしてもうひとつ、「もし君がダメなら、僕がしてみようか」という夫の一言が彼女を励ました。

「もし「母親だろ」と言われたら、手をつける気になれなかったかもしれません」と書いています。

私はミシンを踏むのが好きですが、それは幸い、今まで作ったものが喜ばれてきたからなのかもしれない、と思いました。

(A)

## 幼児の教育

第九十九巻 第七号

(二〇〇〇年七月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十二年七月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五-1-1

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三-五三九五-六六一三(営業)

☎〇三-五三九五-六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇二-一九六四〇

☆

本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。



20世紀は子どもにとってどんな100年だったのか。  
今世紀の総決算と21世紀の「子ども」を展望した保育者必読の書!!

# 子ども 100年のエポック

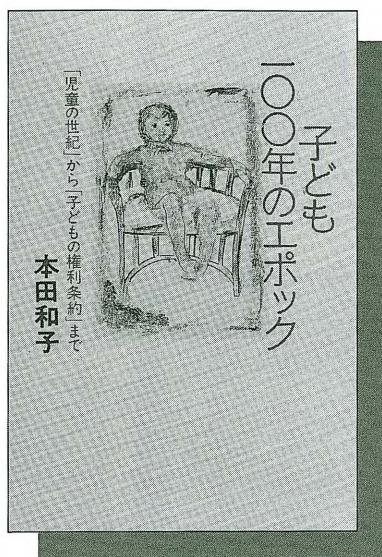
「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで

\*本書は  
『幼児の教育』の連載を  
もとに  
まとめたものです。

## 【内容】

この100年間の「子ども観」「子ども-大人関係」の変遷をたどりながら、20世紀の「子ども」を総括した一書です。

世紀の終焉期に頻発する子どもの不可解な事件や理解しがたい言動……  
これらが物語っていることは何なのか、そしてなぜいま私たちは「子ども」が見えなくなってしまうのか、保育の前提にある「子ども理解」を深めるのに役立ちます。



**最新刊 !!**

本田和子／著

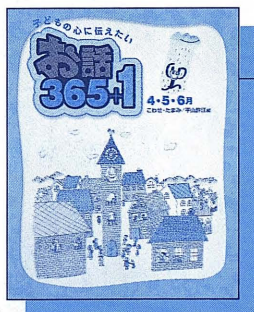
四六判 280ページ 定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの  
**フレーベル館**

一日一話、読み聞かせに最適の1冊です

子どもの心に  
伝えたい

# お話365+1



●4・5・6月



●7・8・9月



●10・11・12月



●1・2・3月

## 最新刊

世界や日本の昔話・創作童話の中から、子どもに話して聞かせたいお話を366厳選し、一日一話に配分してあります。  
楽しい話、怖い話、びっくりする話など、また、美しい言葉の詩も加えています。  
大人が読む手がかかりとなる「ひとくちメモ」「今日は何の日？」のコラムも設けてあります。

こわせ・たまみ／平山許江／編

AB判 各212頁 各定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの  
**フレーベル館**

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。